

学習院女子高等科 二年

## 社会的良心を信じて

石川 李津

私が電車通学を始めたのは小学生になったときでした。

駅のホームに立つと、スピードを保ったままの電車が目の前を通過し、風が衝撃波となつて顔を叩き、手を伸ばせば車体に届いてしまうほどの距離の近さに、「これは普通のことなの。みんな何とも思わないのかしら。」と、疑問と恐怖を感じていました。

それからまもなく、JR目白駅のホームから視覚障害者の方が転落して亡くなるという痛ましい事故が起きました。この駅は私の小学校が附属する大学の最寄りで、学校行事の際に利用する身近な駅だったので、事故には衝撃を受けました。やはりこの状態が「普通」ではいけなかったのです。私たちは何をしておかなければならなかったのでしょうか。事故後、ホーム内側を示す内方線付き点状ブロックとホームドアの整備が進みましたが、対策はまだ万全ではなく、視覚障害者が犠牲になる事故は近年も続いて起きています。

今年の五月一日の毎日新聞で、全盲の記者の方の、電車と接触し、生死の境をさまよつた体験に関するコラムを読みました。

電車のとてつもない力に引きずられながら、私は「もうだめだ！」と死を覚悟した。(中略)半年近く病院のベッドに横たわりながら、ずっと頭から離れなかった光景がある。ホームの端に向かっていると気づかず歩を進めていた私は、そばをすれ違う何人かの気配を感じた。しかし、呼び止められることはなかった。電車に引きずられながら「自分は社会から見捨てられたんだ」と悲しくなった。

この文章に触れて、私は自分がその場にいるかのような錯覚に陥りました。彼の歩みに気づいていながら、その先に何が起るか想像できなかつたのか。自分が動かなくても誰かが動いてくれると見て見ぬふりをしていたのか。もし私が居合わせていたら、咄嗟に動けたのか。視覚障害者

の方に声をかけなかったこと、大げがをさせたこと以上に、社会に見捨てられたという絶望感を抱かせてしまったことに、その場にいた人たちと同様に、自分にも社会の一員として責任があると感じました。この記者の方にお詫びをしたい気持ちでいっぱいになりました。

いつもは新聞を読んで情報を受け取るだけの一方通行ですが、今回は居ても立ってもいられなくなり、初めて新聞社にコラムへの自分の思いをメールで送りました。また、その記者の方は過去に盲導犬を使用されていたのとどこだったので、我が家ではずっと保護犬の預かりや里親のボランティアをしていること、今後、引退した盲導犬、あるいは盲導犬になれなかったキャリアアチェンジ犬の里親ボランティアをして、まず自分にできる具体的なことから視覚障害者の方を支えたいと思っていることもお伝えしました。

すると思いがけず、コラムの執筆者ご本人の佐木理人記者から私に直接メールが届きました。感想を送ったことへのお礼と、盲導犬のボランティアの面からのサポートは嬉しく、私からのメールを励みに執筆を続けるとのメッセージをいただきました。

視覚障害者の方と直接交流させていただいたのは初めてのことでした。まだ実際には何も行動を起こしていない自分へのお礼の言葉には面映ゆい気持ちもありましたが、今

まで私の中で「視覚障害者」という漠然とした概念であったものが、それぞれの方の人生という、形あるものとして見えてきた気がしました。

私は佐木記者の活動について調べてみました。日本で唯一の点字新聞「点字毎日」の記者として、視覚障害者を取り巻く問題取材し、障害の有無を超えて、「共に暮らす社会とは何か」について考えるきっかけを提供なさっています。点字毎日の創刊は約百年前、その目的として初代編集長の「発刊の言葉」に「これまで盲人に対して眠れる社会の良心を呼び覚まさんとする」とあります。「眠れる社会の良心」という言葉が私の胸に響きました。彼らは、一人の独立した市民として社会で活動する視覚障害者を支援するためだけでなく、晴眼者、つまり視覚に障害のない人びとの意識を変えるためにも活動しているのです。私たちの中には必ず良心があつて、まだ眠っているだけなのだ、と信じてくれているのではないのでしょうか。

事故後ベッドに横たわる佐木記者に、交通局の人は、「あなたがどうして立ち入り禁止と書いてあつて、通常人の行かないホームの端に進んでいったのか理解しかねます。あなたの事故について、私どもには一切過失はありません。」

と言ったそうです。この発言の方が理解できないではありませんか。悔しさ、悲しさ、むなしさに震えた佐木記者は、

この後地下鉄の運営側に過失を認めて改善することを求めるために、法的に戦っていきます。しかしその根底には、こうした取り組みが「だれもが自由且つ安全に移動できる街づくり」の実現につながっていくという、社会の良心、私たちの心を信じてくれている気持ちがあるのでしょうか。そして私はその期待に応えたいと心から思います。

佐木記者の事故は二十五年前、目白駅の事故は九年前、その頃から比べると視覚障害者を取り巻く環境は改善したのかもしれませんが。ところが今、新型コロナウイルスの感染拡大にともない、接触と会話を避けるこの環境は、人の心という点で逆行してしまっていると感じます。ペットが感染したと報じられると盲導犬に無理解な視線が注がれ、社会的距離が見えない視覚障害者が距離を詰めてしまうと、心ない態度を取られるという相談が絶えないそうです。彼らと共に生きる私たちは、今の彼らのより困難な状況を想像、理解し、社会の良心を取り戻さなくてはなりません。彼らは私たちを信じてくれているのですから。

◇心の輪を広げる体験作文◇

つくばだいがくふぞくちようかく  
筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部 一年

## ありがとう

きのした  
木下  
かの  
花乃

私は重度の難聴者だ。会話をする上で、口形を読み取り、声と合わせて変換することで初めて相手の伝えたいことが分かる。私はこのような理由から、初めて会った健聴者たちには自分から「口を大きくはつきり動かして欲しい、呼ぶときは肩をトントンと叩いて欲しい。」とお願ひしている。そうするとみんな「ああ！ちよつと待っててね。」と言ってすぐに紙とペンを取りに行ってくださいる人、マスクを外して声も口も大きくしながら伝えようとしてくれる人、スマホに字を打って見せてくれる人、様々な方法で難聴者である私に伝えようとしてくれた。その度に嬉しいという気持ちの反面申し訳ないという気持ちを覚えた。

私が小学生の頃、よく遊んでいた健聴者の女の子がいる。その女の子は、同じマンションの下の階に住んでいて、毎朝新聞を取りに行くときに会うことが度々あった。その当時健聴者に対して大きな恐怖心と不信感を持っていた私はその子に目も合わせず、通り過ぎていった。ある日学校

帰りの途中で、地域の小学校に通っているあの女の子に会った。たくさん友達に囲まれながら、楽しそうに、「じゃあ三時に〇〇公園集合ねー。」と遊ぶ約束を取り付けながら私の前を颯爽と通り過ぎた。同じ学校の友達が近くに住んでいなかったその当時の私は「学校が終わっても、友達と遊びに行けるなんて」と純粋に羨ましいなあと思っていた。家に着いて、母に頼まれた郵便物を取りに行こうとしたら、またあの子に会った。変わらず通り過ぎようとしたら、なんとあの子から初めて話しかけられたのだ。「さつきいたよね？一緒に遊ぼう！私、Sって言うの。あなたはやさしいかな？比較的聞きやすい声で話してくれたの。言っていることが全て把握できた。嬉しかった。話しかけてくれたのが。遊ぼうと誘ってくれたのが。私は花乃。遊びたい。」と答えたら、ひまわりのようにさつきの友達にも見せていたあの笑顔が返ってきた。そういえば、さつき遊ぶ約束をしていたあの友達はどうしたんだろう、気になった私は聞

いてみた。「さっきの友達は大丈夫…？」そうしたら、あっけらかんと「断ったよー、それよりもずっと前から私は花乃ちゃんと遊びたかったんだ。」と恥ずかしそうに言ってくれた。びっくりした。そして立て続けに無垢な目で「そういうえば耳に付けているのなーに？」と人工内耳を指してきた。私は黙り込んでしまった。怖かった。どんな顔をするのか。引かれてこのまま終わってしまうのか。障害のことを自分から話したことも、初めて友達になってみたいと思ったことがなかった。でもそれ以上に話してみたい、友達になりたいという気持ちが強かった。「私、耳が聞こえないんだ、だからこういうのを着けているんだ。」という言い、恐る恐る顔を上げたら、「そうなんだ！じゃあどんな風に言えば伝わるんだろう。」と次々と提案してくれた。「嫌じゃないの？友達になつてくれるの？」と反射的に聞いた自分がいた。「そりゃあ最初はどんな風に話せばいいのか分からなかったけど、嫌じゃないよ。むしろ嬉しい！また明日も一緒に遊ぼう！」と言ってくれた。一刻も早くお母さんに言いたくなるぐらい、飛び上がりたくなるぐらい本当に嬉しかった。こんな私でも受け入れてくれる人がいるんだと。高一になった今でも鮮明に覚えている。それから、毎日遊んだり仲良くなるまでに時間はいらなかった。自然とSの姉妹を始め、友達とも遊ぶようになって。そしていつの間にか健聴者に対する恐怖心、壁がなくな

なっていった。今は引越してしまっただけで、以前と比べると会える回数は減ってしまったがたまにこっちに遊びに来ると、話が止まらなくなるぐらいずっと話している。その子のおかげで、今私はこうして健聴者の人に自分から障害について説明したり、友達もできた。本当にSには感謝しかない。ありがとう。

その子に出会ってから考えたことがある。それは、私自身も最初は自分とは違うヒトに対して恐怖心や、壁を感じていた。しかし自分とは違うヒト、すなわち健聴者の立場になって考えると、おのずと同じような発想になるのではないか。お互いに自分とは違うヒトだと思い、拒絶し、遠ざけ、自分から壁を作っていたのだ。しかし、お互いに理解したい、友達になりたいという気持ちがあれば案外難しくないのであるかもしれない。これからも自分から積極的に自分の障害について説明していこうと思う。大学など新しい世界も生まれ、きっと上手くいかないこともあるだろう。それでもたくさん傷付いて、成長していきたい。

北海道釧路江南高等学校 三年

# 共生社会きょうせいしゃかいのススメのために

八巻やまき花音かのん

「楽しかったね。」

そう言って彼は、私にハイタッチを求めた。彼の目の高さ  
に両手を差し出すと、私の手と彼の手は、ぱちんと軽快な  
音で響いた。

彼はA D H Dという発達障害を抱えている。その苦しみ  
は私には分からない事で、私はただ彼の近くで見守る事し  
かできなかった。彼は小学生で、私はただこの体験授業の  
ボランティアをしている高校生で、それなのに私は彼から  
多くのことを学び得た。彼は私から何を感じ取っただろう  
か。

この体験授業は一日泊まり込みの大きかりなもので、参  
加者の小学生は多く、それに反比例してボランティアが少  
なかった。彼はたまたま、私の担当の班に所属している参  
加者で私は事前に彼についての情報を書類で確認してい  
た。しかし実際は書類なんかほとんど役に立たない程に大  
変だった。まず私は、人の話を聞く間じゅう、彼の手を握っ

ていなければならなかった。彼はじっとしている事が苦手  
で、一度私の手を離れたら、連れ戻すのに恐ろしい時間を  
要した。そして他の子たちの冗談やからかいを真に受けて  
傷ついたり、暴力的になる彼を慰めたり宥めたりしなけれ  
ばならなかった。私は彼がするりと私から逃げるのを見る  
たびに冷や汗をかき、彼が仲間の言葉に過度に応酬するた  
びにかかる、周りの子たちからの心ない言葉に困惑した。  
私は何度も仲間の子たちを集め、彼の特性について説明し  
たが、小学生の頭で理解をさせる事は難しい様子だった。

障害は目に見えない。特に発達や精神に関わった障害な  
ら、なお目に見えない。それを抱えて生きる苦しさも、きつ  
と想像を絶する。他人の立場で考える力を身につけないと  
私たちは彼らの力になれない。彼から学び得たものの中  
で一番誰かに伝えたいことはこれだ。それを学んだのは、夕  
食後の自由時間の事だった。この時間は子どもたちが唯  
一、広びろとした体育館の中で、走り回って遊ぶことが許

されている時間で、子どもたちが一番楽しみにしている時間だった。鬼ごっこも、ボール遊びも、輪投げもできる。子どもたちはわくわくを隠しきれない、という表情で私の「遊んでいいよ」の言葉を待っていた。

「じゃあ、みんな遊んできていいよ。」

全員の夕食が済んだ事を確認し、私は子どもたちを解放した。子どもたちは奇声を発しながら四方八方に散り散りになる。そんな中彼だけが、手持ち無沙汰という顔をして私のことを見つめた。

「遊んでおいで。」

私は彼の背中を押した。ここでできる遊びを提案し、他の子と混ぜておいでと提案した。しかし彼は一向に動きださない。私の手を握ったままでじっと他の子たちの姿を見ている。

「じゃあ、私と遊ぼう。」

私は他の子と彼と一緒にさせることを半ば諦めそう言った。きつと彼は今日たくさん刺激を浴びすぎたのだ。今からまた他の子と遊ぶのは、彼にとっては苦痛かもしれない。私はそう判断した。私は彼の目の前でボールを転がした。「キャッチボールをしよう。」と言って彼にボールを渡す。小学生というのは、体力の塊で、いくら疲れていてもキャッチボールはできるのだ。それは彼も例外ではなかったやうで、彼はすぐにボールを受け取り、私に投げ返した。

私は彼の不安定なボールを両手で受け取り、ふわりと投げた。何度も続けると、彼の口から笑い声がもれた。ああ、よかった、彼にもこの時間の楽しみ方があるのだと私が安堵した時に、背後から声が出た。

「どうしてあの子とばかり遊ぶの。」

その子は彼と同じ班の女の子だ。まゆと口元をゆがませて、私に言う。

「わたしと遊んでくれないじゃん。」

どきり、とした。そうかもしれないと思ったからだ。その子はずっと私と遊びたかったやうだ。しかし私が彼に気を取られるあまり、私は彼女から「遊ぼう」と言う勇氣も、私にボールを渡す元氣も奪ってしまった。私は彼女に謝った。そして彼の事を説明した。けれども彼女は「分からない。」と言った。彼女には私が彼を特別扱いしているようにしか見えないし、彼が抱えるものの苦しさも分からない。

小学生を相手に、障がい者との共生社会を築くための教育を施すことは、やはり難しいのだろうか。客観的に相手を見る力は、どうやって育まれるのだろうか。私は彼に、そして彼女に何をできるだろうか。障がい者との共生社会を目指すには、やはり小学生という純粋無垢な時期からの教育が必要に思う。彼の気持ちを彼女や他の子たちに分かりやすく代弁する事が、共生社会の第一歩になるのだ。そ

れを実現させるのは、きっと今若者である私達なのだ。私は将来、共生社会を目指した教育の先駆者になりたい。もっと、彼の見ている世界の、それを支える教育者の、それを見ている彼女の、生きやすい世界のために。

◇心の輪を広げる体験作文◇